

隣、いいですか？

盛岡第三高校2年 小野光璃

「隣、いいですか？」
葉だ。それは、今年の春、バスの中で言われた言
動揺だった。小説や漫画の中ではよく聞くフレ
席が多い。しかも乗っているバスは二人掛けの座
達同士や知り合いばかりで、ほとんどが一人
分空いていた。入学当初は空いている席に疑
問を持っていった。何か月も経つと、次第に
それが当たり前になっていく。立っている人
で、ぎゅうぎゅう詰めになっても空いている席
が、ひどく可笑しかった。窓際に寄せ、声を出さ
ずにその言葉に何度もうなずいた。片耳だけ
していたワイヤレスイヤホンを慌てて片付け、
スマホをバッグに詰め込んだ。声を見渡す
たのは七十代くらい女性の。車内を見渡す
と、優先席も全部埋まってしまっていた。女
性はマスク越しでもわかるほどにっこりと笑
った。私の隣に座った。おしやれなバッグを持
バスに乗って春休みで、部活に行くために私は

た。で見ても、今は違う。大学生たちと男性が話
 か。見たこと、今は違う。大学生たちと男性が話
 をいじつて、今は違う。大学生たちと男性が話
 人、単語帳や参考書を読んでいる人、スマホ
 な。経験は初めてだ。イヤホンをして、こ
 仕方がない。と、その女性に言った。懐かしく
 昔は、ここら辺に住んでいたから、懐かしく
 手伝いで、関東の方からやってきたそう。だ
 に、眉を下げた。二人は知り合いの引越しの
 「私の夫なの。騒がしくてごめん。なさいね」
 と話し始めた。どうやら、大学についての話
 と、思われる。大学生たちが座っている。そ
 を挟んだ。その隣の座席には、二人の知り合
 して、いる。大学生は、男性の隣に立った。通
 学生も、どうぞと言おう。な。座ったままの
 いの年の男性に譲って、いた。座ったままの
 うちの一人が、席から立ち、女性と同じく
 返る。私の後ろから聞こえてきた声に、思わず
 「いえいえ、どうぞ！」
 一度、座った女性に話しかけられ、私はもう
 「ありがとうございますね」
 る。そのせいではない。いつもと雰囲気は違っ
 る。そのせいではない。いつもと雰囲気は違っ
 ため、高校生ではない。お客さんがたくさん
 る。そのせいではない。いつもと雰囲気は違っ
 る。そのせいではない。いつもと雰囲気は違っ

すのにつられて、周りの人たちも会話を交わ
 してゐる。盛岡での思い出話をつくつて
 くれた。私はにぎやかな車内の雰囲気に身を
 まかせ、何度も相槌を打ちながら聞く。女性
 はひとしきり語り終ると、窓外の景色を
 眺めながら、昔は違う建物があったんだよと
 楽しそうに教えてくれた。あの寮、昔はなく
 て代わりには蕎麦屋があった。寮はあつちにあつ
 てね：：。女性の言うことは、初めて知るこ
 とばかりだった。言ひは、初めて知るこ
 と。時折、女性は後ろの大学生たちとの会話に
 も混じつていた。私もちらりと後ろを振り返
 ると、大学生のうち一人と目が合った。そ
 の人はこりと私に笑いかけてくれる。バス
 の人が合うと、私は目を丸くしてしまつた。
 目から、私は話を続けることが出来なかつた。
 小さく息を吐いた。話し続けていたが、やがて
 「やっぱり、バスついでいいわね」
 女性の話し疲れたのか、感傷に浸っている
 のか、ゆっくりに疲れたのか、私には窓の外に視
 線を移す。いつも見る景色が淡々と流れてい
 た。私にとってバスとは、ただの交通手段だ。
 じつと座り、または立ってバスの揺られなが
 ら、目的地に着くのをただ待つ。でも、今日
 のバスは、いつもの違つて思つてもみなかこ
 た。交流の場になるなんて思つてもみなかこ

「コロナのせい、で、なかなかこっちは来れな
 かったけど、やっぱり、嬉しそうに笑いかけて
 くる女性に、さうですねと笑い返す。降りて
 いく。大学生たちは、目的に着き、次々と降りて
 いる。静かになっただけ盛り上がり、ほら、話
 の肩をとんとんと叩いた。そろそろ降りるら
 し。い。ありがとうね」

「女性は、こりりと笑って、バスを降りてい
 った。私は、並んで歩く二人の背中を見つめてい
 た。私が今まで「隣、いいですか？」と言われ
 たことがなかったのは、きつと新型コロナウ
 イルスのせいだろうか。気軽な会話をする
 えるようない。ここから冷たい視線を感じるほど
 だった。あの車内はマスクこそしてはいたが、
 コロナなんて初めからなかつた。では、ないか
 と錯覚してしまっただろうか。いつもあんな
 が流行って、いなかっただろうか。それもあんな
 光景が広がって、いたのだから、前になっ
 これからはあんな光景が当たり前か。それとも、
 のだらうか。あんな光景が当たり前か。それとも、
 「あれから数日後、そんなことを考えながら、

も素敵なこともなく、このように思えた。たとえば交流は増えてい
 なくとも、これからは。コロナさえなくならぬ。だから、交
 流を阻むものはない。個性と目のバス停で降りていっ
 た。窓越しに、彼女も振り返してくれた。小さく手を
 振った。あの女性にも、たった今別れた。彼女に
 先、あの女性にも、たった今別れた。彼女に
 も、会うことはない。顔も声も覚えて
 いない。名前さえ知らない。しかし、一瞬
 でもバスの中で繋がることができたことは、
 これからも忘れないう。流れる。いつもな
 らず聞き慣れたアナウンサーの待つか「降ります」
 の誰かが押した。ゆっくりに押し待たされた。